
主人公はロクデナシ

アンデルセン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公はロクデナシ

【Nコード】

N3416BA

【作者名】

アンデルセン

【あらすじ】

世界初のVRMMORPG“Humans War”。世界共同開発により実現されたそれは、蓋を開けてみればまさかのデスマム。“限りなく現実に近い”世界でありながら、法も秩序も存在しない。あらゆる悪徳が許されたゲームの中で、百万人に及ぶテストーは無事生還できるのか？

プロローグ（前書き）

ファンタジーにするべきかSFにするべきか悩みどころ。

とりあえず、タグに含まれる内容及び、場合によっては十八禁ギリギリの微性的描写、残酷な表現や流血表現が出ます。

頭悪い内容になる確率大なので、お読みの際はご注意ください。

なお、この小説はフィクションであり、現実とはなんら関係性を持ちません。

ではでは、少しでもお楽しみいただければ幸いです……

ブローグ

銀色の閃光が二回、続けざまに斜めの軌跡を描く。

二振りの短剣による高速の蓮撃は目の前の木偶のエネルギー供給ライン、即ち生命線ライフラインを数本まとめて切断。

そこに長身瘦躯の男が手に持った体格に似合わない、無骨で禍々しい銀色の鉄塊を横薙ぎに振るう。

ライフラインからのエネルギー供給が絶たれた機械の木偶に、その破壊の一撃を避ける事は不可能。

易々と下半身に存在する四本の多脚步行部を叩き折り、慣性のまま再度振り下ろした二度目の一撃が兜割の線をなぞる。

バギャツ！ と、鈍い金属音が響き頭部を破壊、モノアイを吹き飛ばし、同時にオイルが噴出した。

数秒と経たず光の粒子となり果て消えていく哨戒型戦闘機械、シャーカー〇七型。

「兄様」

「分かつてる。今日は女神が微笑んでるらしい」

と言つても、この世界に神なんていないがな。

そう口内で吐き捨て、兄と呼ばれた男が先程戦闘し破壊した機械。その消滅して消えた場所に落ちている、サイコロ状の結晶体を拾い、横に転がる十七インチ程度の木製の宝箱に触れる。

「中身はクズばかりですね」

「まっ、最低ランクのコモン級宝箱だったしな」

男を兄様にいさまと呼んだ少女が姫カットで切りそろえられ、腰まで伸ばされた艶やかな髪を撫でつけながら、ドロップ覧に記されたアイテ

ムを見て溜息を吐く。

「でも兄様、キューブは結構上質そうですし、今日集めた分を合わせれば、結構な額になるのではないのでしょうか？」

「そうだな。今落としたキューブ、パツと見てレア級ってところか。アンコモン級も幾つか今日は手に入ったし、これならそこそこになるかもな」

兄様と呼ぶ少女が男の首までしかない身長を嬉しそうに揺らし、凜と響く鈴のような声で口にすれば、男もそれに同意する。

キューブ。それは魔物を倒すと中確率で落とす六面体の結晶であり、エネルギー源としては元より、幅広い用途を持つ資源だ。

二人の見解通り、宝箱の中身は鉄くずなどばかりだが、レア級やアンコモン級のキューブであれば相場の変動にもよるが悪くない値段で取引されるだろう。

「これなら晩御飯は少し豪勢でも……」

途中で尻すばみに消えていく言葉。この世界では圧倒的に食料が少なく、他の物資に比べてそれらは高価である。

食べ物より武器の安い世界 とまでは行かなくとも、それに近いものがある中、“現実世界”のような不自由ない食生活は非常に困難だ。

まして、命の危険が常に付き纏う中、値段と必要性の結果、食事はどうしても後回しにされやすい。

豪華な食事と言うのが、どれだけ贅沢なのかを思い出した少女が口を紡ぐのは当然だった。

「あつ、兄様。東、およそ八十メートルにプレイヤー反応一です」「レベルは？」

「……私達よりは低いみたいです」

パッシブ型の索敵スキルの効果では、相手のレベルが上か下しか分からない。

「おーけー。俺が先行するとバレル可能性もある、先に偵察を頼む。大体の戦闘スタイル、それに実力とかめぼしが付けば最高だな」

「そうですね。では、行つて参ります」

そうして皮製のドレスを指先で摘み、優雅に一礼をして素早く瓦礫の山を音もなく進んでいく。

「^{ハント}狩りは二日ぶりか？ 上手くいけば今日は本当に豪勢な食事が出るそうだな……」

ハント。一部のプレイヤーキラーの間で広まっているPKの別称。PKに成功すれば、相手は装備を必ず一つ以上ランダムで落とす。更にインベントリと呼ばれる、道具袋のアイテムも必ず複数ドロップする。

普通のMMOであればあり得ない程の凶悪なシステム。無論、それには理由があるのだが……

「兄様、戻りました」

のんびりと妹の帰りを待っていたれば、数分と経たず瓦礫の山にそぐわぬ端正な顔が姿を見せた。

ぼんぽんと、ほこりの付いた部分を手で払い、ハントに必要な情報を報告し始める。

「相手は索敵通り一人。戦闘スタイルは片手剣と小型の盾、全身鎧

を使った騎士タイプの男性。丁度シーカーと戦闘中でしたけど、このあたりのフィールドは初なのでしょうか？ 一人とはいえ、随分手間取ってました」

リバイブポイント
「保険のLPは残ってるし……行けるな」

「では？」

「ああ、飛んで火にいるなんてやらだ。一人で行動するなんて余程の馬鹿か、それとも実力に自身があるのか……とにかく、世の中には怖い山賊も居るんだって教えてやらんとな」

そう言って妹と同じ短い短髪をガシガシと掻き凶悪な笑みを浮かべた

シーカーを撃破した瞬間を狙い、先制に放たれた投擲用ナイフ、ダークが二本気の緩んだ隙を見事に突き、接合部及び利き腕に突き刺さった。

「だ、誰だッ!？」

それに答えず、代わりに瓦礫の山から流星のように躍り出た少女の流れるような蓮撃が、明確な意図と共に応える。

足場の悪さをもともせず潜り込むように接近。死を誘う銀色の狂気が踊る。

「お、おいっおいッ!？ まさかPKか!？ クソッ! ここは人が少ないって聞いて高い金払ったんだぞ! ふざけるなクソッ!！」

痛みと混乱に喚き散らしながらも、素早く刺さったダークを抜き、

歯を食いしばりながらバックラーとブロードソードで短剣をいなす。流石は全身甲冑と言ったところか、継ぎ目などの一部以外では掠る程度では傷すら負わない。

「馬鹿かお前？ ムブ・ポイント 座標地点を買うなんて、初心者でもやらねえぞ。んなの騙されたに決まってるじゃねーか」
「ん、ガッ！？」

少女に気を取られている間に横合いから両手剣、特注のツーハンデットソードがその脇に叩き込まれる。

通常より幅広であり、重量も三キロ強に及ぶ鉄塊と遠心力により男が吹き飛び、更に追撃の一撃が踏み込みと共に頭部のヘルメットを粉碎。

「あああああああゝあゝあゝッ！？」

破碎した兜の破片が眼球に突き刺さり、百パーセントのフィードバック率が限らないリアルな痛みを脳内に叩き込む。

のたうち悲鳴を上げる男に静かに少女が忍び寄るより早く、構えなおされたツーハンデットソードが勢いよく振り下ろされた。

悲鳴を上げる暇もなく切断される胴体と首、真っ赤な血が辺りに飛び散り、ドスンと倒れた胴体を中心に小さな水溜りを作り出す。

血臭が少女と男に届き、その顔が僅かに歪むが罪悪感に苛まれた様子は無い。

既にこの行為は、片手で数えるには多すぎるくらいにはおこなってきた。少女はともかく、元より頭のネジが確実に数本飛んでいる自覚のある男なら、尚更罪悪感を感じることもない。

《おめでとう御座います、レベルが上昇しました》

「おつ、やっぱりプレイヤーは入る経験値が桁違いだな。そろそろだとは思ってたが、あっさりレベルが上がりやがった」

脳内に直接女性型合成音声が響き、レベルUPを知らせる。ステータスウィンドウを表示させれば、各ステータスに割り振れるポイントが六ポイント増えている。

レベル毎に貰えるSPは四、六のランダムであり、今回は非常に運がいいと言えた。

レベルの上昇が厳しいこの世界では一のステータス差ですら、確実に実感できる差となるのだから。

「兄様、どうやらこの人LPを持ってなかったみたいですよ」
「はっ？」

んな阿呆なと死体を見れば、確かに普通なら粒子となり消える筈の死体が残っている。

それは即ち、死亡時にホームで蘇生するのに必要なりバイバルポイント ストックは二つまで LPを保持していなかった証拠であり、また

「と言うことはデットか。LPなしで狩りに出るとか馬鹿にも程があるぞ……」

と言うことだった。

なんせ、この世界での死は現実の死を意味する。明確にそう示唆された訳ではないが、それはこの世界では暗黙のルールとして容認されていた。

「ああ、だからやたら経験値が多いのか」

「ドロップも装備品全部にインベントリの半分、間違いありません」

LPの無いプレイヤーは通常のPKより更に多い経験値に加えて、装備の全てとインベントリの半分に及ぶドロップが固定化する。

死人にアイテムは必要ないといったところだろうか。

「さつて、そろそろ日が暮れるな。夜になれば凶悪な魔物も出るし、拠点^{ホーム}に戻るとするか」

「あ、あの兄様……その……」

冷静を売りにしている妹が珍しくもじもじと言いよどむ。
はてと首をかしげ、ああそう言えばと頷き思い出す。

「ん？ ああ……そつか、先ずは“王国”^{キングダム}にいかねーとな。上手い食料を買わないといけないしな」

「ありがとう兄様ッ！」

感激のあまり妹に抱きつかれたたらを踏んでしまう。この数日、食事と言えば硬いパンが主食であったこともあり、その喜びは一入だった。

兄弟とは言え、丁度良い大きさの胸が抱きつかれた腕に当たり、その柔らかく暖かな感触になんとも言えない表情を男が浮かべる。

「んじゃ、帰りますか」

「はいっ……」

歩き出した二人の表情は殺人を犯したというのに明るい。
それもその筈。PKの数々の優遇、それは即ち、PK
いや、殺人を推奨しているに他ならない。

このログアウト不能の世界こそ、現実とは違い、限りなく無法世界であった……

プロローグ（後書き）

後書き

最近めつきり行き詰ってしまい、とりあえず頭悪いの書こうと思いきり、即行で書きはじめた作品です。

見切り発車もいいところで、まさに片道切符。帰りは保証していません。

その場その場で展開を考えるとと思うので、矛盾とか多いかもしれませんが本作品に関してはご勘弁を。

ヒドイ場合は修正しますが、基本頭空っぽで書きたいから用意したものなので誤字脱字とか以外の、大幅な修正は期待できません。

それでは、そんな作者のご都合盛り沢山の作品ではありますが、どうぞこれからよろしく願います。

感想及び評価、誤字脱字の報告があればニマニマと喜びますので気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3416ba/>

主人公はロクデナシ

2012年1月8日22時34分発行